

大佛洞の
佛畫

佛人の古
蹟發掘

沿革

各地と同じく、唯々降雨稀に、一年一二次、或は終歲なきこと有り。夏期は炎熱強く蚊虻殊に甚し。

此地漢唐時代の遺趾多し。其の城東なる頽城の一段は、長さ里許、材料堅實雉堞高厚、依然として存し、今尙ほ當時を忍ばしむ。相傳ふ漢代屯兵の處なりと。又聞く城西に大佛洞あり。山の上下、前後、洞を穿つもの四五百、内皆五彩金粉を施したる佛像を圖畫す。就中其の最高の一洞は、三壁に白衣の大師を刻み、壁上楷字にて輪廻經一部を鐫せり。筆力雄勁、彫法巧妙崇高神に迫る。蓋し唐人の手に成りしや疑ひ無し。尙ほ城北、丁谷山の古刹には、現に唐代の碑を存すと云ふ。予の旅行中、二名の佛人、數十名の土民を役し、北方山中に、古物の發掘採集に従事せる由を聞けり。

史を按ずるに、此地は漢の龜茲國たり。武帝の末年、王、扞彌、其子賴丹をして入朝せしむ。帝賴丹を輪臺（今の布古爾の地）に田せしが、龜茲の人、姑翼之を殺す。宣帝の本始二年（紀元前十一年）常惠其の罪を責むるや、龜茲、姑翼を執へて謝し來る。時に烏孫（今の伊犁地）の漢に在る者を、龜茲王縫賓に賜ふ。元康元年（紀元前五十年）王、公主と共に來